

日比谷

No. 286

2013年5月20日

発行 真宗大谷派 高山教務所

發行者 大町慶華

〒506-0857 高山市鉄砲町6番地

☎ (0577) 32-0776

*毎月20日発行 50,000部

三市一郡無料配布

印刷 山都印刷株式会社

飛驒と教如上人（下）

竹田雅文

天正十三（一五八五）年八月、羽柴秀吉の命で、金森長近の飛騨攻略時、長近は照蓮寺明了に飛騨の情勢を聞き、照蓮寺の安堵（保証）を確約、明了を飛騨の守護役とした。

天正十五年六月十三日

に、京都の伏見屋敷の茶室に新門(教如)を招き、茶会の席で「明了に高山留守居を頼んだ」と申すのと、教如は「尤もである」と同意した事を伝え、飛騨の領国統治政策に照準を必要とし、且つ利用したことが知れる。

伏見城で秀吉は最近に「出陣時の留守に良い家臣がいるのか」と問いたずねると、最近は照蓮寺明了に看守役として城下を守らせていることを伝

えたところ、秀吉は庶民からの渴仰を賞賛し、昭蓮寺に寸志の安阿弥作阿弥陀木仏を授与している。現在の別院本尊と考えられ、焼失記録はないため、その可能性はあるが確証はない。今後本仏調査・研究が待たれる。

翌天正十六年長近は中野照蓮寺を高山へ移転再建に着手するに至り、秀吉と長近・教如の關係を背景に、一気に飛騨における教如を支持する本願寺教団が形成される。その形成期は慶長七（一六〇二）年本願寺東西分派までに飛騨門徒に受容された。

慶長五年七月、八月、教如は下野国小山に徳川家康を陣中見舞い、家康から餞別の黒馬はじめ、

鉄砲・槍各五十筋他多数を拝領し帰洛。その道中警護の一人に長近の家臣津田奎之丞（安秀、後の願生寺願了）が仕えている。慶長五年九月二十日、関ヶ原の戦いに勝利した家康一行は、大津城入り。長近一行も城下に入るが、家康を出迎えた教如は長近一行と対面できず、同月二十二日付金森法印宛書状（願生寺旧蔵、現八尾市立歴史民俗資料館蔵）で、会えなかったことを伝え家康への取り成しを申し立てている。この教如書状こそが長近を介して家康と教如の初期会見を取り成し、慶長七年現東本願寺寺地拝領へのエポック（画期）となる書状である。長近は奎之丞を使い、返礼状を教如の屋敷「北

かし真宗安心の一義は変わることはない。本願寺が二つになつても真宗の教えは変わらず、一宗で本山が二つあるのは目出たきこと」と忖へている。

この照蓮寺明了の領解と教化が、飛驒における東西分派の心得として道智をはじめ飛驒門徒に広く受け入れられた。道智はすぐさま上洛し、教如に「正信偈三帖和讃」の下付を申し上げ、教如自ら「奥書に御判を据え」た東西分派初期証判和讃下付記録として注目される。

この時教如は道智に自筆の「九字名号」を付属している。道智は「思ひよらざることゆゑ、頂きかね」辭退すると、側近の坊官が「その方辭退に及ばず御慈悲なるはと仰せ」の

[illegible]

〔略歴〕 一九五三年生まれ。高山教区東等寺住職。共著「姉小路と廣瀬」他。論文「戦国期本願寺教如と金森長近」「金森長近と照蓮寺——長近の宗教政策と領国統治政策」「金森長近飛騨攻略前後の動向——新出史料を中心に——」他。



ノ御所」へ持參、教如から小幅の「六字名号」と家康拝領の槍一筋を与へられた。槍を与へたのは教如の配慮である。教如は、掃洛の警護を仕え関ヶ原に參戰した長近の家臣である李之丞の勞をねぎらつたのである。



「葬送の様子」

- ①善法院ぜんぽういんの塙はら ②聖人せいじんの御遺骸ごいがいを載のせた奥おく
③松明しょうめいを持つ二人ふたりが先導せんどう。出棺しゅくわんは夜である。
④茶毘ちびの薪ぎを持つ人 ⑤臨終りんしゅうに立ち会あった覚悟かくご尼に

繪解親鸞聖人繪伝 32

無算加礼金無し」の「御慈悲」下付である。これは名号と聖教の同時授与〔中世における相伝は縦巻物(画像・名号)と横巻物(聖教)のセットで、はじめて有効となる〕金龍静氏〕であり、教如による教化・相伝(信心相続)・授与としての「御慈悲」下付事例は注目できよう。教如の言行録「宇野新蔵覚書」には「本願寺の家は慈悲をもって本とす」とある。「教如上人は「慈悲の家」として本願寺を再確認されたのである。」(大桑斉氏)

道智への「九字名号」付属は、まさにその「慈悲の家」を実践した教如上人による東本願寺開創の第一歩であった。

任職の言葉

慚愧無き者

白川組 常徳寺

高島外成

外そと
成なり

慚愧の「慚」は自ら罪を作らず、「愧」は他をして作らせないこと。「慚」は自ら羞じ、「愧」は他に向かつてあらわに羞じること。即ち「慚」は人に羞じ「愧」は天に羞じることと示されています。このことを通して、私の生き方を顧みると慚の心にも、愧の心もなく、他人との関わりを出来るだけ避けて、自分の思いと通ずる者との間柄だけを大切にしている自己中心の生活ではないでしょうか。それは人の痛みや悲しみも分らず、平然と暮らしている姿です。どこまでも自分の思いを通して行きたい自我の強い私であります。この姿は慚愧の

心が無いありさまではないでしょうか。
慚愧の心が無い者のことを「涅槃經」では

「無慚愧」は名づけて「人」とせず、
名づけて「畜生」とす

とありますが、まさしく畜生の生き方を
をしている私でした。このような人間
のあり方を悲しまれ、必ず救わなけれ
ばならぬと誓われた阿弥陀の本願が成
就されているのです。私たちは教えに
照らされて、慚愧無き者でしたと気付
かせて頂くのです。このように気付か
せて頂くはたらきも、本願念仏による
救いもすべて阿弥陀如来から向けられ
たものです。

親鸞聖人は「教行信証」の信巻に

「涅槃經」の文を引かれて、前文に上
げた慚愧の意味をあげ、聖人ご自身も
和讃にうたわれています。

無慚愧のこの身にて
まことのころはなけれど
弥陀の回向の御名なれば
功德は十方にみちたまう

親鸞聖人絵伝下巻第六段 洛陽遷化② 「葬送」

二六二（弘長二）年十一月二十九日夜、親鸞聖人の御遺骸は門弟の担ぐ輿に乗せられ、弟尋有・僧都の善法院を出立、京極を南下して五条の橋で鴨川を渡り、東山烏辺野の延仁寺の茶見所へ向かいました。

越後にいた恵信尼は、臨終に立ち会つた末娘覚信尼の手紙により聖人の往生を知りました。その手紙からは、高僧の往生の際に現れるとされる紫雲や芳香などのきざしが、聖人の臨終の際になつたことを不安に思ふ覚信尼の様子がうかがえます。その後、恵信尼は返信の中で、比叡山の堂僧であつた聖人が、六角堂で聖徳太子の示現の文を得て、古水の法然上人を訪ねて、専修念仏の道に入つたこと、また常陸国下妻で、聖人が觀音菩薩の化身であるという夢を見て以来、聖人を観音の化身と信じて敬つてきたことを述べられ、だからこそ上人の往生は疑いないことだと認めています。

聖人は弥陀の本願念仏を戴き平生業成（信心が定まる時往生が定まる）を説いており、臨終のきざしはなくても往生決定は疑いないと確信していたのです。

定例法座法話(午後1時から) ○5月21日(火)：旭野康裕氏「永養寺」 ○5月27日(月)：大町慶華輪番 ○5月28日(火)：江馬雅人氏「賢賢寺」 ○6月1日(土)：石井宗氏「西教寺」 ○6月11日(火)：大町慶華輪番 ○6月13日(水)：岩崎正親氏「正覺寺」

親鸞聖人の四十二歳の時の「三部経千部説誦」も、五十九歳の時の「寛喜の内省」も、共に自然災害や飢饉で餓死していく人々、悲嘆し苦悩する人々の現実が、親鸞聖人を問い詰めていると理解できる。その厳しい問いに対して、聖人は見て見ぬ振りができないでいる。せめても衆生利益の為にと思い、「げにげにしく(もつともらしく)三部経の千部説誦を始めたいのである。それを善導の教えの言葉によって、思い返すのである。その善導の「往生礼讃」の文は、普通「自信教人信、難中転更難、大悲伝普化、真成報仏恩」という文なのである。しかしその大切な言葉が「恵信尼消息」第五通目では、「身すから信じ、人をおして信ぜしむる事、まことの仏恩を報いたてまつるもの」と表現されて、その三句目が表れてはいない。しかも親鸞聖人が「教行信証」にこの文を引用される時には、この普通の文を引かないのである。唐の智昇の「集諸経礼懺儀」に載っている善導の「往生礼讃」を引く。その智昇の「礼懺儀」では、三句目が「大悲弘普化」となっている。「大悲を伝えて普く化する」と「大悲が弘く普く化する」、一字の違いである。それが大きな違いになる。

他人を普く化してこそ、仏恩を報ずることになる」という意味である。人を化益する力は、あくまで自分にある。それに対して、「大悲弘普化」の文の意味では、「人間が自らの力によって、自信教人信することは根本的に困難なことであって、ただ如来の大悲が弘く普く教化することによってのみ、自信教人信は成り立ち、仏恩を報ずることになる」という意味となる。その時、「自信」も「教人信」も、共に如来の大悲の摂化に依るのである。つまり「自信」が成就したなら、今度は自分の力を頼りにして「教人信」をしようというのではない。「自信教人信」は、全て念仏において如来の大悲が摂化するのである。加えて、「自信」は名号に依つて信じながら、「教人信」つまり「衆生利益」は説経でなっている。たとえ念仏を明らかにする浄土三部経であっても、それを自ら説経することを頼って、衆生利益できると考えることは、念仏以外の方法で達成しようとしていることである。念仏して「自信」が成



就したなら、益々その如来摂化の事実を明白にしてこそ、「教人信」が成り立つということではないか。聖人は、「信巻」にこの善導の「礼讃」の前に、道綽の「安楽集」の「もしよく展転してあい勧めて念仏を行ぜしむる者は、これらをしてことごとく、大悲を行ずる人となつて」という文を引いている。念仏して、その後に大悲の摂化を待つのではない。「あい勧めて念仏を行ずる」ことが、即ち大悲の摂化なのである。「まはさてあらん(本当はそうであらう)」とは、そのことに気づいたということであらう。道綽が一つの譬えを示している。水に溺れる人を見て、助けようとする時、自分が鴨か、鶏なのか知る必要がある。もし鴨なら、水に溺れることなく、その人を助けることもできよう。しかし鶏ならば、助けようとしても共に水没してしまふ。鴨のような水鳥は、羽根を濡らすことなく水にも浮かび、溺れる人を助けて、水面から自由に空に舞い上がることができる。しかし鶏は、水に入ってしまったら、濡れて羽ばたいても沈んでしまふ。もし鶏ならば、水に浮かぶが船に乗ることでしか、共に助かる術はない。善導は、この生死の大海に浮かぶ鴨のような人を「岸上の者」、鶏のような凡夫を「常没の衆生」と呼んでいる。常没の衆生は、ただ念仏によって、「大悲の願船」に乗っていることに気づくばかりである。

「回壇案内」

6月

22日(土)真蓮寺「鉄砲町」
※詳細は会所の寺院にお尋ねください。

婦人研修会参加者募集

日時 6月25日(火)
午前9時30分
午後3時30分
(受付午前9時)

会場 高山別院
講師 古田 和弘氏
(九州大学短期大学名誉
学長・大谷大学名誉教授)

講題 最後のよりどころ
会費 1,500円(食費付)
※今年度より一日研修となります。

※「佐奈姫忌法要」は例年通り6月26日午後1時30分より勤まります。

佐奈姫忌法要

参拝の
ごあんない



佐奈姫さまは、東本願寺13代宣如上人の六子で、1641(寛永18)年8月、照蓮寺15代龍興院宣心の妻として飛騨へ嫁がれました。佐奈姫9歳、宣心19歳でした。

夫の宣心は粗暴であったが、佐奈姫さまはよく仕えたといえます。別邸(現在の高山市松本町)で質素な生活を送り、よく自ら石臼を挽いたと伝えられます。2男1女の3人の子を儲けられましたが、都育ちの身には飛騨の寒さがこたえたのか病を得て、32歳ころ京都に戻り、東本願寺門前の屋敷で寛文7(1667)年6月、35歳の生涯を閉じられました。

毎年6月26日には松本町の佐奈姫さまの墓所に「佐奈姫忌法要」が勤められます。ぜひご参拝ください。

2013年6月26日(水)

会場：佐奈姫墓所・松本公民館(高山市松本町)
法話：大町慶華輪番(高山別院)

13時00分 高山別院出発(※バスが出ます)
13時30分 墓前法要・公民館内仏勤行

※駐車場がありませんので法要当日は高山別院発のバスに乗り合わせてご参拝くださいますようお願いいたします。

7月29日(月)~30日(火)開催!

今年は火おこしからはじめるカレー作りやハイキングなどいろんなイベントが盛りだくさん。飛騨地域のともだちとたのしい夏をすごしてみませんか?

会場 園徳寺(高山市漆垣内町)
参加費 3,000円(食費・保険等含む)
対象 小学校3~6年生
締切 7月8日(月)
※定員になり次第締め切りますのでお早めにお申し込みください。

参加者募集!

定員 80名